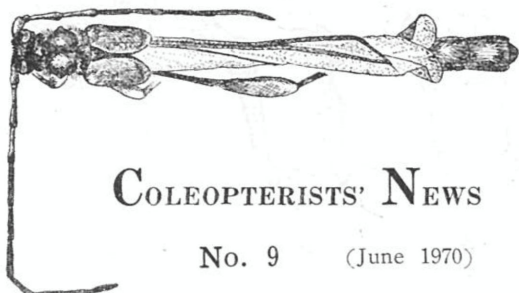


甲虫 ニュース



COLEOPTERISTS' NEWS

No. 9 (June 1970)

日本産タマムシ科解説 (7)

黒 沢 良 彦

B. Tribe Buprestini クロタマムシ族

約20属を含み、ほとんど全世界に分布するが、北半球の温帯地方に多く、熱帯地方には少ない。先の Dicercini フタオタマムシ族とは両複眼が上方に収斂するか平行するかで区別するが、この区別は多分に概念的で、クロタマムシ族の中にも上方に収斂するものが少なくない。

日本には次の3属を産する。

1. — 触角の感覚孔が集中する陥凹部は各節の内方に位し(第3図b参照)、腹部腹板第1節および第2節の縫合線は明らかに認められる……………2. — 触角の感覚孔が集中する陥凹部は各節の末端部外方の先端に位し、腹部腹板第1、第2両節の縫合線は不明瞭…………… 18. *Philanthaxia* H. Deyrolle, 1864
2. — 小楯板は小さく円形…………… 19. *Buprestis* Linné, 1758
- 小楯板は著しく大きく、横位の楕円形…………… 20. *Eurythyrea* Lacordaire, 1832

18. Genus *Philanthaxia* H. Deyrolle, 1864 ヒメマルタマムシ属

インドからジャバとフィリピンに至る東洋熱帯に20余種を産するが、インドシナ半島とフィリピンにもっとも種類が多い。日本本土には1種も産しないが、小笠原諸島に次の1種を産する。

1. *P. yanoi* Y. Kurosawa, 1963 ツヤヒメマルタマムシ 分布：小笠原諸島。父島以外からは知られていない。本属の種類は全部翅鞘の縦条が深く、間室は密に皺状に彫刻されるが、本種は縦条が浅く、間室の点刻も弱く、全く皺状にならなく、一見 Sphenopterinae マルタマムシ亜科の種類に似ている。

なお、近隣地域に産する本属の種類に、*P. sauteri* Kerremans, 1912 ソウテルヒメマルタマムシ(台湾)と *P. convexifrons* Y. Kurosawa, 1954 コウトウヒメマルタマムシ(紅頭嶼)の2種があるが、支那大陸には1種も産しない。

19. Genus *Buprestis* Linné, 1758 クロタマムシ属

主として総北区に分布し、例外的にボルネオ、中米、南米(アンデス山地)、西アフリカなどに産する。約80種を含み、*Buprestis* s. str., *Stereosa* Casey, 1909, *Cypriacis* Casey, 1909 および、*Yamia* Kerremans, 1903 の4亜属に分けられるが、*Stereosa* は北米に、*Yamia* は北アフリカとイベリア半島のみに限られて産し、日本には残りの2亜属が分布する。

なお、ウバタマムシの項でも述べた通り、Linné の *Buprestis* 属の模式種はウバタマムシに近い *B. mariana* Linné, 1758 とする考えがある。この考えに従えば、*Buprestis* の属名はウバタマムシ属に移るので、クロタマムシ属には次に記載された *Ancylochira* Eschscholtz, 1829 を用いなければならないが、ここでは従来考えに従っておく。*Buprestis* Linné, 1758 も *Ancylochira* Eschscholtz, 1829 も模式種は共にヨーロッパ産の *B. octoguttata* Linné, 1758 ヤツボシタマムシである。

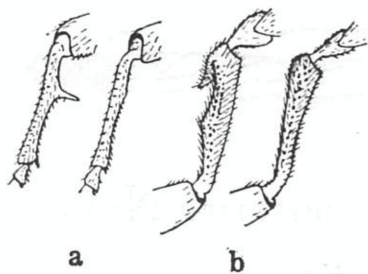
日本に産する2亜属は次の点で区別される。

1. — 翅鞘に点刻列のある多数の縦溝条がある…………… a. *Buprestis* s. str.
- 翅鞘は縦隆条を有し、その間は密に点刻される…………… b. *Cypriacis* Casey, 1909

a. Subgenus *Buprestis* Linné, s. str. クロタマムシ亜属

総北区、中南米などに57種を産するが、日本に確実に産するのは次の1種だけである。ほとんど全部の種類が針葉樹の枝幹の材部に加害するが、針葉樹に加害する種類でありながらヤナギ類に加害した例が北米で記録されている。

1. *B. (B.) haemorrhoidalis* Herbst, 1780 クロタマムシ 分布：日本全土、琉球(奄美諸島、八重山諸島)、朝鮮、樺太、満洲、シベリア、中央アジア、トルコ、ヨーロッパ。旧北区の中北部に広く分布する種類で幾つかの亜種に分けられている。



第6図 肢に現れる第2次性徴
 a. *Dicerca furcata aino* Lewis
 フタオタマムシの左中脛節(左♂,
 右♀)
 b. *Buprestis haemorrhoidalis*
japonensis E. Saunders クロタマ
 ムシの右前脛節(左♂, 右♀)

1887 に似て来るので、私は日本のものを亜種にした。また、奄美大島のものは全体が銅色を帯び、翅鞘の縦溝が浅く、別亜種 *arakii* Y. Kurosawa, 1942 に属する。最近八重山諸島の西表島から記録されたが¹⁾、この標本に関する限り、日本本土のものと大差ない。一般に雄の顔面には汚黄褐色の斑紋があるが、雌でこの斑紋を表すものはごく稀である。また前胸背の前縁角に小さな赤色紋のあるものや腹部腹板末節の両側にある赤紋を欠くものなど種々の変異があり、それぞれに命名されている。本種も次種も雄の前脛節端の内方に鋭い鉤状の突起があるが(第6図)、雌にはない。しかし、この特徴は本属の各種に共通するものではなく、雌雄全く変わらないものもある。

2. *B. (B.) strigosa* (Gebler, 1830) キボンタマムシ 分布: 日本(本州)?, 北朝鮮, 満洲, 樺太, シベリア, 蒙古。

各翅鞘に1~4個の黄紋のある顕著な種類であるが、時に黄紋が全く消失し全体黒色の個体がある。翅鞘の黄紋のほか顔面、前胸の前縁角、腹面などにある汚赤色紋の形や数によって多くの名がついているが、これを挙げるのは無意味だから除く。北樺太から翅鞘の地色が黒色のものを *B. (B.) novemmaculata* Linné, 1758 キボンタマムシ、翅鞘の地色が青色を帯びたものを *B. (B.) octoguttata* Linné, 1758 ヤツボンタマムシ(共にヨーロッパ産)として記録されたが²⁾、これは共に本種の同定誤りである。北朝鮮と北樺太の針葉樹林には普通に産するものらしい。私の手許に「長野県」と云うラベルのついた1♂があるが、他に日本で採れたと云う記録を知らない。あるいは、日本アルプスなどの高地の針葉樹林に生息するかも知れない。

近隣地域に産する本亜属の種類にヒマラヤと台湾

日本に産するものは大型で黒味が強く、*japanensis* E. Saunders, 1873 と云い、従来独立種とされていたが、日本でも寒冷地のもは小型で唐金色が強く、シベリアや朝鮮に産する亜種 *sibirica* Fleischer,

に産する *B. (B.) aurantiopicta* Castelnau & Gory, 1837 (台湾産は亜種 *esakii* Y. Kurosawa, 1954), 中国雲南省に産する *B. (B.) fairmairei* Théry, 1911 などがある。後者はキボンタマムシに似るが翅鞘の間室が交互に脈状に隆起し、本亜属と次の亜属を結ぶ位置にある種類である。

b. Subgenus *Cypriacis* Casey, 1909 スジタマムシ亜属

総北区に約20種を産するが、旧北区産の5種と最近台湾から記載された1種はいずれも極めて稀な種類ばかりである。

1. *B. (C.) niponica* Hoscheck, 1931 アカヘリミドリタマムシ 分布: 日本(本州, 九州, 伊豆新島)。ヨーロッパに産する *B. (C.) splendens* Fabricius, 1774 の亜種として記載されたものであるが、Obenberger は独立種とした(1941)。極めて稀なもので、青森県十和田、岩手県宮古、福島県湯の花温泉、伊豆新島、京都(原産地)、和歌山県高野山、熊本県白髪岳などの産地が知られている。幼虫は赤松の幹に加害するらしい。九州産は大型で翅鞘上側板の中央部に後方に向う鉤状突起があり、亜種が異なる。ヨーロッパの *splendens* も暖かいバルカン地方に産するものは同様の鉤を持っているのは興味深い。

2. *B. (C.) sterbai* Obenberger, 1943 ステルバアカヘリタマムシ 分布: 日本(南部)。色彩は前種に似ている。腹面と肢は金緑色、前胸背の形も前種に似て側縁に円味が無いが、前胸背の中央に縦溝があり、翅鞘の隆脈が強く隆起する点は次種に似ている。産地は原記載には単に「南日本」とあるだけで詳細は判らない。私はこれに当る標本を見たことが無いが、北米カリフォルニアに産する *B. (C.) venusta* Casey, 1909 によく似ているので、あるいは同一種かも知れない。この種は米松材について戦前朝鮮で採集されており、日本にも次種と共に輸入される機会が多いと思われる。

3. *B. (C.) auruleta* Linné, 1758 アメリカアカヘリタマムシ 分布: 北アメリカ(太平洋岸地方)。前胸背の側縁が円く、中央に縦溝があり、翅鞘の縦隆脈は強く、腹面は銅赤色。米松に付着して、アメリカから日本、オーストラリア、パラオ諸島、西インド諸島、チリー、ヨーロッパなどに輸出され、一部では土着している。日本では戦前に京浜地方、阪神地方、四国松山などでかなり採集され、あるいは赤松や黒松について土着したのではないかとも考えられたが、戦後になって採集された例は少なく、私は東京代々木で採れた1例³⁾を知るだけである。

20. Genus *Eurythyrea* Lacordaire, 1832

アオタマムシ属

ヨーロッパと北アフリカに4種、中央アジアに1

3) 1♀, 東京都渋谷区代々木, 28. ii. 1955, 石川良輔採集

1) 藤田英生: 西表島より新記録の甲虫3種; 甲虫ニュース(7), p.4 (1969)

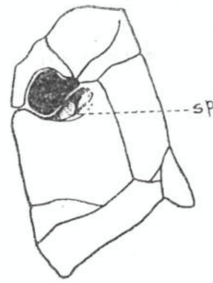
2) 玉貫光一: 北樺太の甲虫類に就いて; 動物学雑誌, 38 (455), p.282 (1926)

種、シベリア東部（アムール地方、ウッスリー地方）と日本に3種、合計8種を含むだけである。西の分布地域と東の分布地域の間に広いブランク地域があるのはキンヘリタマムシ属によく似ている。朝鮮から「アオタマムシ」と云う記録があるが、これはどの種類か判らない。台湾の記録は後述するように明らかな誤である。

1. *E. eoa* Semenow, 1895 エゾアオタマムシ
分布：日本(北海道)、シベリア東部（アムール地方、ウッスリー）。アムール地方から記載されたものであるが、北海道のものはこの記載に当るのでこの種名に同定した。大陸産のものと比較したらあるいは相異点があるかも知れないが現在では大陸の標本がなく、それができない。故松村松年博士や三輪勇四郎博士がアオタマムシと考えられたのは全部本種であるが、翅端が鋭い1本の歯状に終るので2歯ある他種とは一見して区別出来る。幼虫はエゾマツ、トドマツ類に加害するものと推定される。

2. *E. obenbergeri* Y. Kurosawa, 1963 イワキアオタマムシ 分布：日本(本州北部)。前胸が狭く、側縁に円味が少なく、小楯板は中高、翅端は小さく弦月形に削られ、その両側の歯は同じ大きさである点で他種と異なる。また後脛節が内方に弯曲する。福島県楡葉町木戸で採集されたただ1頭の雌によって記載されたものであるが、その後の採集例を知らない。

3. *E. tenuistriata* Lewis, 1892 アオタマムシ
分布：日本(本州、四国、九州)。翅端は斜に削られ、その両側の歯状突起の大小が異なるので、他種と異なることはない。現在の分布北限は日光、上高地などで、裏日本からの記録はない。幼虫は赤松、桐、樺などの衰弱木か枯木に加害する。台湾から記載された *E. kawakamii* Miwa & Chūjō, 1935 カワカミアオタマムシはその記載では「翅鞘の先端は半月形に鋭く削られ、その両端は鋭く尖る。この点 *E. tenuistriata* Lew. のそれとは著しく異なる。」となっているが、その原色付図では翅端は奇妙な形に外方に突出し、1歯に終わっているので、久しく疑問に思っていたが、1965年に訪台した際に模式標本を検したところ、この付図とは全く異なる形をした日本産の *tenuistriata* アオタマムシそのものであることを確認することができた。この誤は、三輪博士が北海道のエゾアオタマムシをアオタマムシと信じ、真のアオタマムシをご存知なかったためらしい。因みに、台北農事試験場には真のアオタマムシの標本はこのカワカミアオタマムシの模式標本以外になく、エゾアオタマムシに *E. tenuistriata* Lewis のラベルが付してあった。またカワカミアオタマムシの原色付図は美しくはあるが、この翅端ばかりでなく、横楯円形の大きな小楯板が小さな三角形に画かれているなど全く不正確な役に立たぬものである（この様な三角形の小楯板を持ったタマムシはムツボシタマムシ類になる）。またこの標本は「李嶼山、台湾」とはなっているが、台湾産ではなく、或る事情で *E.*



第7図 *Melanophila acuminata* DeGeer
ツメアカナガヒラタタマムシの感觉孔 (sp)
(K. D. Sloop, 1937 より模写)

tenuistriata Lewis の模式標本そのものである可能性もあるので、本種の分布に台湾を加えることはしない。

C. Tribe Anthaxiini

ヒラタタマムシ族

ほとんど全世界に拡り、次の2亜族に分けられる。

1. — 前胸背板の後縁は明らかに波曲する。腹部末節端は削られる……………
…… a. *Melanophilites*
— 前胸背板の後縁は截断状またはわずかに波曲する…………… b. *Anthaxites*

a. Subtribe *Melanophilites* ナガヒラタタマムシ亜族

ほとんど全世界に分布し、約8属が含まれる。日本には1属を産するだけである。

1. — 扁平、中基節窩の側縁に接して一感觉孔がある (第7図)……………
…… 21. *Melanophila* Eschscholtz, 1829
— 背面は多少隆起し厚味があり、中基節窩に接して感觉孔を欠く……………
…… 22. *Phaenops* Lacordaire, 1857

21. Genus *Melanophila* Eschscholtz, 1829 ナガヒラタタマムシ属

総北区に多くの種類があり、南米と東洋区にも例外的に数種を産する。日本には次の1種を産するだけである。この属の各種は松類をたく煙の刺激臭に誘引される性質があり、北米では firebug の俗称がある。中には50マイルも離れた所から飛来した例も記録されている。日本のツメアカナガヒラタタマムシも焼畑のまだ燃っている立木に沢山来集することがあると云う(西尾美明氏談)。またかまどの煙に來たと思われる例もある。*Phaenops* 属のものにはこの様な習性はないが、これは中基節窩に接してある感觉孔の有無に関係があるものと考えられている。

1. *M. acuminata* DeGeer, 1774 ツメアカナガヒラタタマムシ 分布：総北区中北部。タマムシ科の中でもっとも広く分布する種類で、北米とユーラシアに広く分布する種類は他にない。日本産は大型で、前胸背の網目状が強い点で亜種 *obsculata* Lewis, 1892 に属する。北海道、本州、九州に産するが個体数は少ない。幼虫は赤松などの針葉樹の樹皮下を加害すると思われる。原亜種は北洋材について樺太やシベリアから輸入されることがある。

22. Genus *Phaenops* Lacordaire, 1857 ヒメナガヒラタタマムシ属

日本には1種も産しないが、総北区にかなりの種類があり、一部の種類は針葉樹の樹皮下を食害し、木材に付いて本来の分布地以外の地域で発見されることが多い。北洋材について輸入されたり、輸入されるかも知れない種類に、青色や唐金色で無紋の *P. cyanea* (Fabricius, 1774) (ヨーロッパ, シベリア, 満洲), *P. sibirica* (Pic, 1918) (シベリア東部), 黒地に6個の小黄紋のある *P. guttulata* (Gebler, 1830) ムツモンナガヒラタタマムシ (朝鮮, 満洲, シベリア, 蒙古) などがある。また米松について北米から輸入された種類にムツモンナガヒラタタマムシによく似て小黄紋のある *P. lecontei* (Obenberger, 1928), *P. caseyi* Obenberger, 1944, *P. vandykei* Obenberger, 1944 などがあり、輸入されるかも知れない種にやはりよく似ている *P. drummondii* (Kirby, 1837), *P. flavoguttata* (Harris, 1829), *P. piniedulis* (Burke, 1908), *P. californica* (Van Dyke, 1918) など多くの種類がある。

b. Subtribe Anthaxites ヒメヒラタタマムシ亜族

ほとんど全世界に分布、約15の属に分けられる。オーストラリアに分布するものは南米の中南部に産するものに近く、総北区に多数の種類のある *Anthaxia* ヒメヒラタタマムシ属はジャバ、ボルネオなどの大スンダ諸島とフィリピン諸島までは分布しているのに、小スンダ諸島、セレベスからニューギニア、ソロモン群島にかけては本亜族のものは1種も産しない点は注目値する。

23. Genus *Anthaxia* Eschscholtz, 1829 ヒメヒラタタマムシ属

総北区に極めて多くの種類があり、一部はアフリカ、南アメリカ、スンダ列島を除く東洋区にも分布している。約400種を含み、スペインの *A. Cobos* のように、南米に産する *Agriaxia* Kerremans, 1903 や *Cylindrophora* Solier, 1851 などをも本属の亜属とするならば、その種数は500種近くにもなる。しかし、一方にはソ連の *A. Richter* のように本属を3属に分割し、それを更に多くの亜属に分けるような学者もある。私には材料不足で *Cobos* の説を批判することはできないが、手許の総北区や東洋区の標本による限り、必ず中間種があるので、*Richter* の説には従うことはできない。ただ幾つかの亜属に分けることは必要であると考え、日本を含めた東亜の本属は大体において次の2亜属に含めることができるであろう。成虫は花に来ることが多い。

1. — 体は幅広く扁平、翅鞘は完全に腹部を覆い、側縁は波曲しない…………… a. *Anthaxia* s. str.
- 体は多少中高でむしろ細長、翅鞘の側縁は多少波曲し、腹部は翅鞘側縁より膨出して背面より認め得る…………… b. *Haplanthaxia* Reitter, 1911

a. Subgenus *Anthaxia* Eschscholtz, s. str.

クロヒラタタマムシ亜属

総北区の中北部に広く分布し多くの種類がある。日本には次の1種を産する。

1. *A. (A.) reticulata* Motschulsky, 1859 クロヒメヒラタタマムシ 分布：日本（北海道、本州）、樺太、北朝鮮、シベリア東部。シベリアの *Dauria* から記載された種類で、アムール地方、ウッスリー、樺太などに原亜種を産する。日本産は次の亜種に属し、それぞれ前胸背の側縁の形が異なる。

a. subsp. *aino* Y. Kurosawa, 1963 分布：日本（北海道）。道南地方を除く北海道各地に普通で、5～8月に各種の花に集まる。

b. subsp. *shinano* Y. Kurosawa, 1963 分布：日本（本州）。日本アルプス地方と関東山地に産し、北海道産より大型で前胸背側縁の膨出が強い。現在のところ、奥多摩、八ヶ岳、入笠山、伊那地方などが産地として知られている。尾瀬や日光など北関東山地のものは北海道のものに近く、中部地方のものとは異なるように見えるが、材料不足ではっきり区別することができない。5～6月頃タンポポなどの花に来ると云う。

c. subsp. *yamato* Y. Kurosawa, 1963 分布：日本（本州）。近畿地方に産し、前胸背の側縁が波曲する。

なお1948年に私が *A. (A.) quadrifoveolata* Solsky, 1871 と誤って同定して報告したりものは本種である。

b. Subgenus *Haplanthaxia* Reitter, 1911

ヒメヒラタタマムシ亜属

地中海から中近東、ヒマラヤを経て、中国、台湾、朝鮮、日本にかけて多くの種類があり、北米大陸の中南部にも数種ある。日本領には5種ある。この亜属のものもやはり花に来る。なおソ連の *A. Richter* は日本産の *A. proteus* E. Saunders を模式種として新属 *Cratomerella* を創設したが⁴⁾、これはヨーロッパ産の *A. cichorii* Olivier を模式種とする亜属 *Haplanthaxia* Reitter, 1911 から区別するに足る特徴がない。

1. *A. (H.) proteus* E. Saunders, 1873 ヒメヒラタタマムシ 分布：日本（北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬）、朝鮮、満洲、中国、シベリア東部。各地に普通で花に来る。幼虫は松類の枝幹に加害する。雄は黄緑、雌は暗緑色で時に全体黒色になる。var. *minuta* Miwa & Chûjô, 1935 は雄に、var. *matsumurai* Miwa & Chûjô, 1935 は雌に付けられた名で区別する必要はない。朝鮮からシベリア東部にかけて産するものは別種 *psittacina* Heyden, 1887 とされているが、本種から区別する

4) 黒沢良彦：日本産 *Anthaxia* 属に就いての覚書；昆虫学評論，1 (1), p. 2 (1948)

5) A. A. Richter : Fauna SSSR, XIII (2), Buprestidae, 2, pp. 38~39 (1949)。

特徴が全くない。恐らくは同一種であろう。

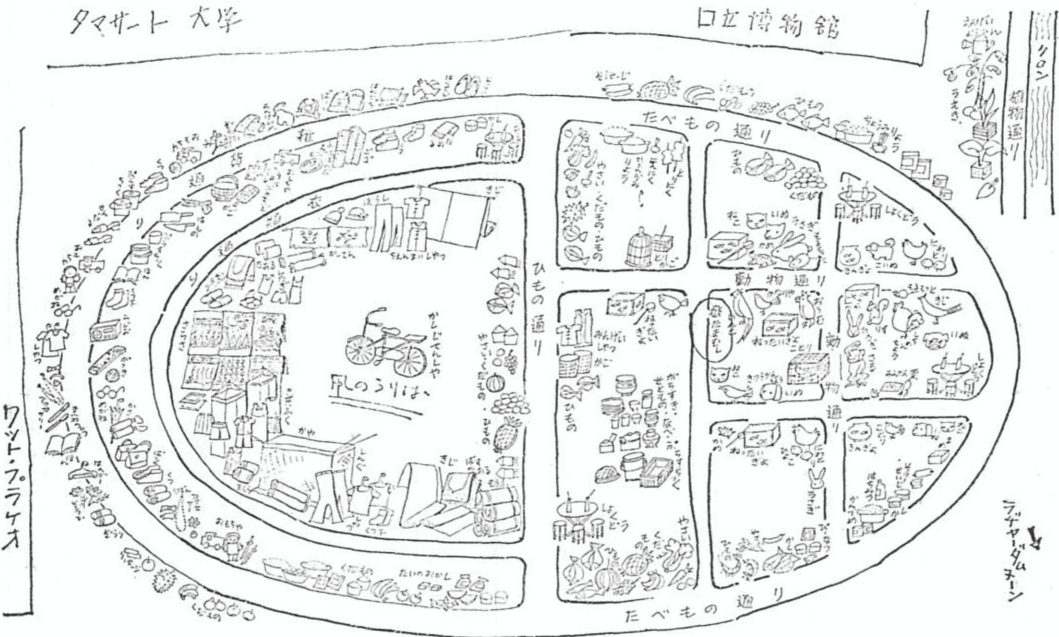
2. *A. (H.) rubromarginata* Miwa & Chûjô, 1935, フチトリヒメヒラタタマムシ 分布: 日本(北海道, 本州, 九州, 対馬), 朝鮮, シベリア東部(ウスリー)。北海道札幌を模式産地として前種の変種として記載されたものであるが, 前種とは異なる種類である。同時にやはり前種の変種として記載された var. *viridomarginata* Miwa & Chûjô は本種の異名である。また, ウスリーから記載された *A. primorjensis* Obenberger, 1938 も同様に異名である。日本では稀で, クヌギ, クリ, アベマキ, コナラなどに集する。

3. *A. (H.) arakii* Y. Kurosawa, 1965 アマミヒメヒラタタマムシ 分布: 琉球(奄美大島, トカラ諸島)。奄美大島とトカラ諸島の中之島にだけ

産する。一見ヒメヒラタタマムシの雌に似た色彩をしているが短太で前胸背の後縁角が赤いものが多い。また前者の雄交尾器は先端に鈎状突起があるが, 本種にはない。この点で台湾の *A. (H.) aeneocuprea* Kerremans, 1914 に最も近い。

4. *A. (H.)* sp. オキナワヒメヒラタタマムシ 分布: 琉球(沖縄)。沖縄本島だけに産する美しい種類で, 前胸背板の基半は銅赤色, 前半は金緑色, 翅鞘は緑青色, 体下は青緑色。近く中条道夫博士によって命名される筈である。

5. *A. (H.)* sp. ヤエヤマヒメヒラタタマムシ 分布: 琉球(八重山諸島)。石垣島と西表島に産する美麗種。前胸背は金赤色で翅鞘は金銅緑色, 体下は金緑色。本種も中条博士によって命名される筈である。(国立科学博物館)



○タイのタマムシたった9円

バンコクに出張された山田義孝氏によると, 同市の週末青空市場では, 生きた美しいタマムシを1匹9円で売っているという。おそらく *Sternocera aquisignata* であろう。

なお安松先生の「昆虫と人生」によると, タイワシタガメ(干もの)は, 1962年秋中尾舜一博士がこの地を訪れた時, 1匹58円であった。カットは, タイ国日本人会機関誌「クルンテープ」1969年12月号所載の1部分。(Tea Eye)

計 報

会員磐瀬太郎氏は昭和45年2月28日午後1時に逝去された。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

氏は人も知る日本における蝶類研究の大家で, 日本鱗翅学会々長であったことは知らぬ人はないと思う。しかし, 蝶蛾以外の昆虫にも多大の興味を示され, 甲虫談話会には昭和31年以來の会員であったと聞いて驚く方も多と思う。常にユーモアを忘れず, 以前何かの機会にヒラタタムシ科の事について

話し合っただけ以来, 「自分はヒラタタムシ科の専門家」と称しておられた。本号に掲載したタイ国のタマムシの話は氏が亡くなられる約3週間前に会宛に頂いたものであるが, これが氏の甲虫に関する唯一無二の報文になってしまったのは残念である。生前の氏にこれを印刷してお目にかけられなかったのはかえすがえすも心残りではあるが, この報文の印刷をもって氏の霊前への餞と致したい。(黒沢良彦)

○アカヘリサンガメの獲物追加(1)

アカヘリサンガメ *Rhynocoris ornatus* Uhler の獲物について、最近筆者は既往の知見をまとめておいた(アカヘリサンガメの卵と獲物, *Rostria*, 19: 79~80, 1969)が、本年(1969)、更に新しい資料を得ることができたので、ここに追加しておく。

観察場所及観察年月日: 青森県西津軽郡岩崎村泥沢。1969年7月22日(晴)午前9時頃。

ヨモギ葉上にてアカヘリサンガメ成虫(♀)が、ハムシダマシ *Lagria nigricollis* Hope の成虫を捕えているのを発見した。ハムシダマシは右側の前胸・中胸間に口吻を当てがわれ、吸液されていたが、発見時には既に完全に死んでいた。

(埼玉・鶴ヶ島町 大野正男)

○山形県蔵王のゴミムシ2種

昨年夏、山形県蔵王を訪れた際、オサムシ用トラップによって、下記のゴミムシを採集したので報告する。

1. *Pterostichus chujoiellus* Jedlička

1♂, 蔵王ザンゲ坂, 16. viii. 1969, 筆者採集
本種は青森県から記載されたもので、これまで青森県及び岩手県の一部で、その分布が確認されていたが、この度蔵王より採集された。新分布と思われる大変興味深い。

2. *Parabrosicus crassipalpis* Bates

2♂♂, 蔵王ザンゲ坂, 16. viii. 1969, 筆者採集
Lewis によって、兵庫県から採集された1♀によって記載されたツヤヒラタゴミムシの一種で、1956年 C. Lindroth により、その形態がヒサゴゴミムシに類似していることから、*Parabrosicus* の新属名を与えられた。また、その種名は扁平に広がった *palpi* をもつことに因んでいる。本種は乾燥がちの林地に棲息する種類で、分布北限として山形県酒田市が知られているが、蔵王に於いては初記録と思われる。

末筆ながら両種を同定して下さった須賀邦耀氏に謝意を表す。(千葉県野田市 柄沢保彦)

○福島県でネプトクワガタを採る

1966年6月24日、飯豊山麓の弥平四郎部落から稲荷峠に通ずる林道で1♂を採集した。道路ぞいの中洲に生えたヤナギ類の樹液に來ていたもので、大脛を除き体長17ミリの小型の個体である。

その地域、福島県西会津地方は、オケサマルクビゴミムシの分布を典例とするように、阿賀野川を介して裏日本とのつながりが強く、同時に日本海側を北上する暖地性昆虫の侵入も認められる。ネプトクワガタの採集は、同日同所で採ったダイミョウナガタマとともに、こうした分布傾向を示すものとして興味深い。(福島市 田添京二)

○キマダラカミキリの初見日

キマダラカミキリは、東京近郊では、例年では6、7月頃に現れ主として夜間に活動する。今年は3月に入ってから低温のため昆虫類の発生が異常に遅れ、10日ない半月も遅れたと云われている。ところが、本年5月8日夜東京都世田谷区岡本の私の家の電灯に本種1♂が飛来した。これは例年よりも著しく早い発生で他の昆虫の遅れに逆行した例であるので報告しておく。(東京都世田谷 黒沢良彦)

訃報

通称はっちゃんこと高橋慶二郎君が今年1月30日急逝された。謹んで哀悼の意を捧げる。

高橋君が農大に入学したのは昭和37年春で直ちに昆虫学研究室に入室した。彼は林学科に在籍した関係から林業害虫特にキクイムシの分類を専門に研究するようになり、林業試験場の野淵輝博士からも懇切な指導・鞭達を得て鋭意研究に専念していた。その一部は野淵博士と共著で「あきつ、13(1): 1~3」に発表されている。

彼はまた採集にも強い熱意をみせ、北は利尻島から南は奄美大島までの日本各地はいうに及ばず、沖縄、台湾までその足跡を伸ばし、本誌3号にはタイワンツノコガネの採集例を報告するなど多くの珍虫種を採集している。これらの採集品に基いて発見された報告は数多いが、なかでも奄美大島で採集したダイココガネは野村鎮氏によって *Copris brachypterus* と命名された新種で学名が示す通り後翅が退化している変わった種で糞虫愛好者を驚かせた。また利尻島で採集したハネカクシを全て私に提供されたが、この中にも新種が含まれ *Tachinus keijiroi* として記載した種は彼に献名したものである。彼の専門のキクイムシ類のコレクションもかなりのもので未知の材料が数多く含まれている。これらの材料をこれから検討しようという折に急逝されたのは痛恨の極みである。ともあれ、常に笑の渦を巻きおこすほがらかな彼にもはや接することができないのは寂しい限りである。心からご冥福を祈る。

(渡辺泰明)

甲虫談話会

会費(1カ年)500円、第10号は6月末発行予定、投稿メ切は5月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電(822)0111, 振替東京60,664

マレー半島産甲虫類(コガネムシ、クワガタムシ、カミキリムシ、ゾウムシ、其他)が多数入荷しています。御希望の方は返信料御封入のうえ価格表を御請求下さい。

東京都練馬区石神井局私書箱2号
大蔵生物研究所